

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：11101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24659981

研究課題名(和文) 統合失調症患者の認知機能を改善するソフト“MCT”の効果検討に関する研究

研究課題名(英文) Investigation into the effects of the software, MCT, for the improvement of cognitive function in people with schizophrenia

研究代表者

則包 和也 (NORIKANE, Kazuya)

弘前大学・保健学研究科・講師

研究者番号：00342345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：統合失調症患者(以下、患者)を対象として、メタ認知トレーニング(以下、MCT)の効果の検討を目的とした。MCTは、パワーポイントの画像を基にした集団認知行動療法を実施するソフトである。本研究ではMCTを週に1回(約60分)、計8回実施し、その前後で3つの尺度(自己関係づけ、Locus of Control、ネガティブな反すう)への回答を求めた。対象者は、入院中の患者15名(男性:6名、女性:9名)であった。MCT実施前後の回答を統計的に比較すると、ネガティブな反すう尺度に有意差があった。この結果から、MCTの介入によって、嫌な事を繰り返して考えないようにする認知が強化される可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to investigate the effects of metacognitive training (MCT; S. Moritz et al., 2010) in people with schizophrenia (hereinafter, patients). MCT is a program for group cognitive behavioral therapy that uses PowerPoint images. In the present study, MCT was performed once a week (approximately 60 min) for a total of 8 sessions. Before and after each MCT session, answers to 3 scales were obtained (self-reference, new locus of control scale, and negative rumination scale). Subjects were 15 hospitalized patients (6 men, 9 women). On statistically comparing answers before and after implementation of MCT, we found significant differences in the negative rumination scale. These results suggest that MCT may strengthen cognition so that patients do not repeatedly have unpleasant thoughts.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 臨床看護学

キーワード：統合失調症患者 治療的介入 認知行動療法 グループ

1. 研究開始当初の背景

統合失調症によって物事の解釈や判断をする認知機能(以下、認知)が障害されると、対人関係に深刻な影響を受けることが多い。しかし近年では、早期介入や新薬の開発に伴い、統合失調症患者(以下、患者)の認知機能が大きく損なわれることが少なくなった。本研究で用いるメタ認知トレーニングシステム (metacognitive training; 以下、MCT) は、認知行動療法(以下、CBT)の理論を用いて、患者の偏った認知に働きかける介入ツールとして開発された (S.Moritz et al 2010)。同年、Moritzらは、ドイツ精神医学・精神療学会賞を受賞し、MCTの有効性に注目が集まっている。

2. 研究の目的

本研究では入院治療中の患者を対象者として、MCTを実施し、自己と他者、及び出来事に対する認知の変化を統計的に比較し、MCTの効果を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

病院長、看護部長、病棟師長に本研究の主旨を説明し、同意を得たうえで、患者の選定を進め、十分な説明と自由意志を口頭と署名によって確認した後に、対象者としての同意を得た。

3種類の質問紙への回答を依頼し、回収した。

対象者をMCTを実施するA群と実施しないB群に、無作為に分けた。

MCTをA群に集団で8回実施した(1回約60分間、1/週)。MCTの進行は本研究者が担当し、対象者がジュースやお茶を飲みながら、リラックスした雰囲気に参加できることに配慮して行った(図1)。

MCT終了後に、A・B両群に同様の質問紙への回答を依頼し、回収した。

質問紙のデータを統計的に比較した。統計ソフトはSPSS16.0 for Winを使用した(p

<.05)。

質問紙は、自己関係づけ尺度(以下、自己関係尺度、金子,2000)(成人用一般的)Locus of Control 尺度(以下、Locus 尺度、鎌原ら,1982)、ネガティブな反すう尺度(以下、ネガティブ尺度、伊藤ら,2001)を使用した。自己関係尺度は、得点が高いほど、自己とは無関係な出来事を被害的に関連づける傾向が高い傾向があることを示す。Locus 尺度は、得点が高いほど、自分の能力や技能が周囲の状況に反映しているという認知をもつ傾向が強いことを示す。ネガティブ尺度は、得点が高いほど嫌な出来事を繰り返し考え続ける傾向が強いことを示す。

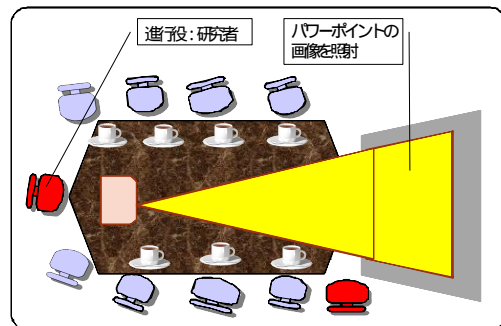


図1. MCT実施状況

【倫理的配慮】

対象者には、本研究の目的、内容、研究への協力が自由であること、いつでも協力を辞退できること、プライバシーの保護を厳守すること等を記載した資料を配付し、口頭で説明した。なお、本研究は弘前大学大学院医学研究科倫理委員会の承認を得て実施した(2012-096)。

4. 研究成果

(1) 平成24年度

本年度は、X病院のY病棟(慢性期開放病棟)で入院治療中の患者を対象として実施した。MCTを介入するA群7名(男性3名、女性4名、年齢 51.6 ± 16.0 歳;入院期間 10.6 ± 11.6 年)と、介入しないB群9名(男性5名、女性4名、 53.8 ± 8.7 歳;入院期間 8.0 ± 12.1 年)に分けて研究を実施した。

質問紙のデータを MCT 実施前後で比較したところ、A 群では、自己関係尺度では有意差がみられなかったが、Locus 尺度では、内的統制が有意に高まっていた($p=0.048$ 、表 1)。また、ネガティブ尺度では、否定的に考える傾向が有意に改善していた($p=0.041$ 、表 1)。B 群では有意差はみられなかった。

表 1. 各群における MCT 実施前後の比較

| | | A群(n=7) | | B群(n=9) | |
|------------------|-----|--------------|--|--------------|--|
| | | 中央値(最小 - 最大) | | 中央値(最小 - 最大) | |
| 自己関係づけ | 1回目 | 37.3(12-58) | | 22(12-56) | |
| | 2回目 | 36(12-60) | | 26(12-50) | |
| Locus of Control | 1回目 | 43.3(29-60) | | 50(27-72) | |
| | 2回目 | 53(41-72) | | 54(34-72) | |
| ネガティブな反すう | 1回目 | 39(26-48) | | 35.7(20-40) | |
| | 2回目 | 34(21-46) | | 35(11-59) | |

また、MCT 実施前の質問紙のデータを両群で比較すると、有意差はみられなかった(表 2)。

表 2. MCT 実施前の各尺度の両群比較

| | 自己関係づけ | | Locus of control | | ネガティブな反すう | |
|----|-----------|------|------------------|------|-----------|-----|
| | AV±SD | p値 | AV±SD | p値 | AV±SD | p値 |
| A群 | 34.9±15.4 | 0.29 | 43.6±9.4 | 0.41 | 39.3±7.0 | 0.6 |
| B群 | 26.8±13.8 | 0.39 | 49.6±16.7 | 0.75 | 33.6±9.2 | 0.1 |

これらの結果から対象者は、MCT の介入によって、他者や出来事に対して、運や成り行きに任さずに、能動的に対処しようとする認知が強化される可能性が示唆された。また、嫌な出来事を、繰り返して考え続けずに、頭を切り替えようとする認知が強化される可能性が示唆された。

(2) 平成 25 年度

本年度は、X 病院の Z 病棟(慢性期開放病棟)で入院治療中の患者 8 名(男性 3 名、女性 5 名、年齢 51.6 ± 15.9 歳、入院期間 2.4 ± 2.5 年)に対して、MCT と 3 種の質問紙を前年度と同様に実施した。

得られたデータを、前年度の MCT を実施した A 群のデータに加えて、分析を行った。対象者は、合計 15 名の患者(男性 6 名、女性 9 名、年齢 51.3 ± 15.4 歳、入院期間 6.2 ± 8.9 年)であり、調査期間は H25 年 10 月 ~ H26 年 3 月であった。

質問紙のデータの比較を、MCT 実施前後で行うと、ネガティブな反すう尺度で有意差がみられた($p=0.043$ 、表 3)。

表 3. MCT 実施前後の比較

| | | 中央値(最小 - 最大) | |
|------------------|-----|--------------|--|
| 自己関係づけ | 1回目 | 26.0(12-58) | |
| | 2回目 | 30.0(12-60) | |
| Locus of Control | 1回目 | 42.0(29-60) | |
| | 2回目 | 45.0(30-72) | |
| ネガティブな反すう | 1回目 | 38.0(15-48) | |
| | 2回目 | 34.0(18-46) | |

この結果から、MCT の実施によって、対象者の嫌な出来事を繰り返し考え続けたい認知が強化される可能性が示唆された。これらのことから、MCT は統合失調症患者への集団認知行動療法として、有効であると推察され、精神科看護における治療的な介入の幅が広がることが期待された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

統合失調症患者への集団認知行動療法の効果、則包和也、川添郁夫、日本精神保健看護学会 第 24 回学術集会、横浜市立大学金沢八景キャンパス、2014 年 6 月 22 日。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

則包 和也 (NORIKANE Kazuya)

弘前大学・大学院保健学研究科・講師

研究者番号：00342345

(2)研究分担者

川添 郁夫 (KAWAZOE Ikuo)

弘前大学・大学院保健学研究科・講師

研究者番号：80624741

(3)連携研究者

石垣 琢磨 (ISHIGAKI Takuma)

東京大学・大学院統合文化研究科・教授

研究者番号：70323920